松平能見
池田

略譜 七

二百十一冊内

内閣文庫
類 和書
號 三六〇八八
冊 二一一
架 一五六函 一〇

395

内閣文庫	
番號	和 36088
冊數	211(129)
函號	156 17

信光君御代

松平

源次

高九百三拾石余

家紋 九門之葵
花葵
丸ノ内酸漿
板笹
丸ノ内桐
又七桐

和泉守信光君八男

次郎大馬尉

光親

信光君
親忠君ニ仕数度の御合戦ニ軍功有

記録御用所

三河国額田郡和田之郷之領之節○天
文十五年四月十五日死、三河額田郡
能見村松應寺小葬

重親　　傳七郎

母親忠女
信忠男而仕信忠勤而之[illegible]
信康○永禄六年二月十日死同

寺小葬　次郎左衛門　号書

親友
三河国額田郡合戦ニ付討死、家老
中務大輔家人梶今年勝興祖

重吉　　次郎左衛門尉

永禄九年十五歳の時三河廣忠へ

故并ハしらし出世のひ公日蔭とうれく
義光境の郡を治せんとて騎を
合戦首を捕り治せる領貢し其
よし　松平弾正ハ已に馬　射昌安に達せと
この時
清康君ハ初年より達ち給へし昌安
御族見よりしこる古の働と感服し
清康君の藝術稽古の仍相よしと
なすり　昵近と

広忠君より
東照宮ハ御く年法せつ天文十八年
東照宮ハ駿府の方の其府中の宮崎
御城ハ今川治部大輔義元より被
務と重く其嫡を分別の御家人ハ
取の要門ゆかりに無度出んと依
預ハ駿府城代ハ石川左衛門太夫其外に仍
大久保出雲守其外ハ鳥居伊賀守
忠吉次郎左馬尉并に右衛門法軍

事の評定也〇永禄三年今川
治部大輔義元の家士鵜殿長門守
居住しけるハ三河宝飯郡の城に籠
りける
東照大権現御発向ありて彼地へ
御発向ハ初陣なりけれハ三河の諸士
勇ミて責戦ふ次郎か大高の城を責落し
候年ミ鵜殿か兄弟之城下にて戦ひし
兄弟を生捕り二男其外数多
家士名倉惣助なるもの先立て
三河の軍士にして大に勝利を得鵜殿
百餘人を討て城に火を放ち鵜殿
兄弟を揚らに義元の事方働の別
腕と記せられ付 上意に付事方
多勢のうちに次郎大輔に先祖代流
の名を以て事を別して当家にありし
今に至ても軍功抜群の名を遺せ
書
貝稿の御感状と添られ

一永禄六年九月一向宗蜂起の時酒井
将監忠尚三河国碧海郡上
野城に籠る松平上野介并本多
宮内少輔親久同蔵人佐鳥居尉信
助大久保衛門尉常吉に仰付られ彼地へ
差遣城方の旗氏酒井酒之丞といふもの
三左衛門を召具て一戦に及ふ
主右を抜群の働有り落去の後
城方の軍士酒井与九郎首を取之

武藤某森川金右衛門氏俊本多九助
広正村越茂助直吉本国(目)降参
にて共に戦ひ人をあまされ名和打たれ
速方働の旗本等に付与九郎中
より出て之を取り軍士数多の
うち金の扇一本を下され其色の為
指物をさし将軍門に出る抜
群のく城方の軍士多勢討取
一同加へ賞目付へ下されける其

九郎も是まてとて討死す今はこれまてとて大
将斬働見へけるか終に討死すかくて
高天神等の城次郎左衛門守之右高
天下のけしき見て使を遣し小栗惣吾備前守宗光
相賀り焼失○天正元年八月初浅井小
谷氏に列守将に居候し一揆を催
後朱庫居城同国足助を責へ
しらんと彼地より人数を向られけれは
勝利足助の城は鈴木氏か守る

かくて徳川信康君は初陣なり次郎太夫
敵兵の武功ありとし也
東照宮より信康君へ初く御
兄を手付○同二年二月勝頼の
侍大将徳川大炊尉信蕃を為二俣
籠城の付は味方無く織田信長の
軍書る彼城を責へつゝさ次郎左衛門
発向し諸軍にせんと立城をも押寄せ
諸将衆感賞して徳川宮松平之

康安より以しハ我先祖義氏より
当家代々ハ何れも祢し候ふの兵
平山氏流去りたる家元之者ハ他家の軍
法を迎へすにあらはとも
此を以て先祖かくしたりとも
この事兵法ハ古今流の法
貫爾の武功老人より伝授有る作
有と申候ハつ天正八年八月廿七日
死ハ捨て歳同年よ葬

重玄

阿紹和右馬尉　大島實文

初重決

元亀二年二月是助ニ地伝昌清
秋分の風吹ひつゝ闇世百ゝ村の脇ニ
青山大紋右衛門義門家人と華ハ
百ゝ村ニ池向昌清の屋敷と鶴岡
ここには省
東照公の御仰せ百ゝ村欄と名付候

をも出し夜中所々に篝火をとほし岩城の
まもりかたき事とて一揆退散の企にて静謐す
属せり同年十月上旬重ねて越後の
地侍一揆を起し同国五ヶ浜よりの岩崎
発向同月十日の夜に入岩津村まで
押寄せ鳥追に放火せしかは青山左京
青山平之丞文卯右衛門小林太兵衛
二手に分かち命をうけ岩津村へ発向合
戦しける所多村よりも追来て勝利を得る

自己始メ
引返しは殿追討し斉藤山城守と
会まる岩を寺に文明の間に小河和
和村のたちよりて所々に討死す
敵は東ニ所方面口へ門退く勢も
とかく上まで退しかも度々の戦功御感を
蒙せり右源左大島佐衛門も
父と所よ軍功を励討死せしより

言次
父と共に討死
大島佐

傳市郎

重利

東照宮御創業より奉仕永禄三年
五月織田信長家臣尾州房山砦
城今川治部大輔義元之軍勢相向
責戦
東照宮之御出馬により重利従軍同月
十八日城中へ押寄戦功を励討死

能見久平御助

重茂

永禄五年二月六日今川家人鵜
殿日向守長照遠江之浜松郷
籠城の時強勢あり
東照宮の従軍して出張し働きた
戦ふ同年四月十七日某にて討死

重之

原左衛門

小深瀬之嫡

重勝　大隅守　初伝之助
今村平兵衛与親賢祖

昌利　伝七郎　伝市郎　広島

東照宮
台徳院殿ニ奉仕○初父ノ新死せし時
十五歳ニて伯父伝之助重勝ニ後

見仰付られし所飯の門も方に居るハ
然るに重勝并ニ伝七郎昌利家人
後藤角左衛門両人と喧嘩の趣仰付
られし十五歳ニ成ニ付其上〔ミ〕右
厳命ニて無為ニ其後十五歳ニ付ゆるし
其後伝之かつしらく伝之助
重勝〔角左衛門再興〕且一尤
定リ也〔角左衛門〕御座に
東照宮之〔以〕無之候ニ付父ヰ重利公御

三万石侍之節一飯並ニ被下候御書ニ
返ノ御与へ候へハ侍之節も大隅
小姓ニ而も大番頭も勤メ申候へハ侍帯節
今又御家老成候ニ付候へハ侍帯節
路料は別ニ被下候ものと存候へハ
角之儀御重ニ御申され　御前ニ
退しに又々御前へ罷出申候
却而私之側の気遣ニ存候も無之角
之儀御尋ねの間の事ニ甚切々候

しんくは余りましき事ニ候へハ
候ハ是之御教を心得も宜ニ御遁世致し
ここも御便ニ思召され候ハ御行
路料ニ被下黄金料百五拾両又
の他ニ添られ高天神之陣
甲州之陣小牧之陣長久手之陣
小田原之陣奥州九戸之陣関ヶ原並大坂
之陣とも七度従軍し御咄一承
存候夏両陣ニは

台徳院殿ニ信尹卿御姪の好依テ御縁ニ
在勤ニ而慶長十八年江戸へ下りて
関東ニ而御目見ニ付十二月九日従五位下
元和二年之歳同年ニ卒

信尹卿　広盛　勝盛

関右

慶長九年二月
台徳院殿ニ初而御目見小姓ニ被召出○

大番組頭ニ而大坂之陣ニは
台徳院殿御供仕松平伊豆守所ニ而
供奉之陣ニは江戸御留守○元和九
年四月
大猷院殿御上洛の時御供仕○寛永
二年十二月十一日五百石加増都合千石
の采地東国ニ而拝領○同九年正月
台徳院殿御遺金五拾両拝領○同
十九年二月又金十両与力御番加役

五百石○慶安四年（羽州於秋）九百石被成○万治二年七月十二日致仕
○同年十月十九日死 法名某 相州鎌倉郡 和泉村 松寶（霊）院ニ葬

昌秀

傳市郎 又兵衛 清之丞

万治二年七月十二日（[illegible]）家督 大番

○寛文元年七月六日 武州橘樹郡

谷村 橘樹寺ニ而○同年十二月十日死 父ト拾歳 同寺ニ葬

昌勝

権九郎 傳市郎

初ハ父ノ養子ニ致候処 嫡子 同年十二月六日死 同寺ニ葬

昌永

嘉兵衛 初源之丞 伊兵衛

二男 惣領○寛文元年十二月十日

宝暦四年小姓ニ成 外伊太郎南昌ヲ養子トス ○大番 ○同二年
十二月七日死 二十七 某門寺ニ葬

南昌

鐵次 初 宗八 伊太郎

次郎太郎 太郎兵衛

實ハ昌秀三男

寛文元年十二月十日分知弐百石

○同二年十二月廿一日大番ニ加ル

尋テ別ニ知弐百石ヲ収メ小姓ニ成 ○天和
二年六月二日大番 ○同年月病免 元禄
○元禄十六年六月十八日死 五拾歳
同寺ニ葬

勝信

庄太郎 作平衛

初 親喜

實ハ森 養春院法印二男

衛門男子なく醫師森杏春院
法印二男にて出家なりしかとも杏
春ハ外孫なる故家を継衛門家ハ
御祖父應徳の末なれハ醫師の事
ハ若年の事なれハ不堪相承久太郎
康綱事にしく老年にて久太郎
杏春院同
常憲院殿御成ハ上意之上家督
元禄十一年十二月願年寄子○同
十六年七月廿一日家督寄小普請

○同十六年二月廿九日初見○宝永
元年十二月廿八日大御番○享保六
年六月廿八日営勤の序令之敍○
同年九月七日同組与頭○同十
年十月廿日病免○元文二年
七月廿七日致仕○寛延元年十月
十日死七拾又葬同寺小普

光寛

大膳亮　初 主殿　又 大膳亮

某年月日 元和 初見○元文二年七月廿七日

家督 小普請○同三年十二月廿六日

大番○明和二年十二月晦日病免

○同六年七月十一日死 稲荷 谷中 葬

氏庸

二男

主馬　利左衛門

宝暦十二年八月廿二日田安殿よ

り召されし尚三とともに 拾年と称を

穏光 姉 観遂

庄太夫　初 金次郎 伊織

寛保二年九月朔日初見○宝

暦二年十二月廿七日大番○明和

二年十月二日家督○同七年

二月廿日大番組頭○同七年十二月廿二日 二條

左京亮ゝ　御儀位　御実禅寺殿
田安大名殿付被仰付〇安永十
年正月十二日小十人ゟ〇同年十二月
十八日布衣〇天明六年十月十八日
御先弓頭〇同七年江戸中町
方勤之節組中不達有之ニ付
十八日世上物静ニ付加役御免〇寛
政二年九月廿六日死　龍之果
同寺ニ葬

光福

次郎右衛門　初　今次

安永六年正月朔日初見〇同七
年七月十九日小性組〇寛政二年
十二月六日西丸御書院〇天明二年十月
廿八日大御所上使見時服〇同八年
十二月廿八日依願射芸御同八月
廿九日時服二〇同七年二月朔日

以令追証候畢

台徳院殿御代
松平 能見
源姓 高昌信
家紋 丸内桔梗 五葉かくさ笹

松平庄右衛門昌利二男

長右衛門

昌舎

台徳院殿ニ新規ニ被召出候 昌信○
後御殿ニ附られ宝永五年御書院番被仰付
是ニ而は申○ 明暦元年十月八日

死六十二來迎谷清蔵寺ニ小葬

含治　長左衛門　初　庄九郎

大番〇寛文二年十二月八日死　羅九
歳円寺ニ葬

含信　源左衛門

寛文二年十二月十日大番〇宝永七
年八月八日大番組頭〇正徳二年

正月七日死七拾　萊円寺ニ小葬

義澄　庄九郎

宝永六年十月廿八日大番〇正徳二年
二月十九日家督〇同四年十二月十一日新
番〇享保十八年十二月九日死　早稲
武蔵円寺ニ葬

昌相　庄吉　後仕正休

享保十九年二月二日家督小普請○寛延元年四月二十日致仕○安永八年八月十四日死　歳九十葬同寺

義同　昌之助

実大義隆二男

寛保二年四月十一日為養子○寛延元年四月二十日家督○同二年新番

九月組入○宝暦九年十二月十六日御新番組頭○同十一年八月二日西丸新番頭○同十二年十一月廿二日為死附○明和二年二月廿二日死　歳五十葬同寺

義具　源兵衛　初源次郎　長兵衛

実桑谷右京卿少弐二男　後仕正躬

明和二年六月八日為年廿家督小

某清○同六年四月廿四日大御番○
天明六年十二月廿四日新御番○寛政
八年四月廿六日病免○同十年四月
廿八日致仕

義栄

千橘

寛政十年四月廿八日家督小普請

東照宮御代

松平 伏見
源姓

二万千石
家紋 丸内三葵 同花葵
同酸漿 五七桐
五三桐

松平左馬頭昌利之曽

傳四郎

重昌

東照宮へ召出され駿河國府中ニ寓居
召返され 大御番○寛文元年 四月十

四月五日兼帯門跡之由被仰出同年十二月
十二日加秩弐百俵〇同六年十月十四日
死 四谷西念寺ニ葬

利正

右近定文 初市之丞 備後守
下野守 右衛門督 市左衛門

年月不知 大番頭〇万治元年七月八日
新番頭〇同二年十二月廿六日 並銀
三〇紀伊〇同三年十二月十日 ……寄合番

乃小納戸
厳有院殿より御広敷番頭名代頭〇寛
文二年四月廿日召出之由被仰付〇延
宝八年七月九日加秩弐百石〇寛文
八年十二月十一日寄合
厳有院殿薨御後寄合より之御広敷
御前番頭之紋附下賜〇天和
二年八月廿一日召出之由被仰付〇同一年
九月廿八日

巌有院殿薨逝之節小姓衆中
御用之とゝまり候人々今日被召出其儀
とゝめまゐらする〇同年九月九日新御番入
右近大夫之後〇同二年十一月廿一日加
秩七百石〇元禄十一年二月廿九日
死七十一歳同所に葬

〇
巌有院殿薨御小十人組御番頭相勤之

元禄十六年十一月廿九日
御書院番之由御渡
書付

正辰

備庇重（本）

元禄六年十二月九日御書院番〇同
十二年七月廿八日家督〇宝永二年
閏十月廿日御徒頭〇同四年八月十二日御使
番〇同六年十月廿五日病免〇享保十
（〇同年十二月布衣十五人之御使番 廿）
年五月廿三日致仕〇同十七年十一月
廿四日死六十七歳同所に葬

一 跡継

新八郎

寶暦元新左衛門跡并之男

跡延享二年十二月二日表方〇享保又

年六月廿二日御勘定小普請〇同年

十一月廿三日御見習〇同九年七月廿一日御書院

番〇同十八年八月八日駿府御城

引渡十月廿日出帆〇同二十年閏月

道奉行於藤二年勤仕の定限

なれとも當年に四年勤仕之文之

年九月十八日御徒番〇同四年十

二月七日大坂御用代り同年十二月

廿八日出帆同年十月廿日帰國〇延

享二年十二月十二日関東関々之儀

日廿八日出帆 御役替〇寶暦元年七月

七日同元以御普請役同年

八月十八日出帆十一月廿日帰國〇宝

暦元年正月七日同光院営修理ニ
つき出役被成候再出勤○同年十二月
十一日忠元養子願○同年十月大御番
織役加役○同二年十二月廿五日○同年
十月十八日死年七十七歳同寺ニ葬

正朝

新八郎　初秀次郎

宝暦四年十二月十一日初見○同年八月
四日家督小普請○同六年十二月右
書院番○明和六年正月廿八日西丸書院
番組頭○安永元年十一月十八日死
年七十七同寺ニ葬

正名

新八郎　初秀次郎

安永元年九月十六日家督小普請○
同年十二月廿二日初見○同九年十二月

廿八日御書院番

嚴有院殿御代

松平 覚

源姓

高千百石

家紋丸内三笹
七曜

松平丹後守重直四男

太郎左衛

重永

正方

明暦二年八月廿八日初見ニ宥父

三年十二月九日御小性組ニ而勤○

延宝二年十月廿二日御小性組衆

加増二百俵○天和二年十月廿一日
加秩五百石○元禄年中廩米皆采
地に換ふ○同十四年八月十日御先手
鉄炮頭○同十七年八月七日死ス年七十九葬
浅草海禅寺中に葬

一正芳

太郎兵衛　初　清三郎

実小笠原壱岐守家臣長谷川某男（小笠原右近将監忠雄家人）

一正貞

太郎左衛門　初　吉松

吉宗○元禄十二年十二月九日家督
寄合○同十四年十二月廿日初見○同
十五年十一月十日御書院番○宝永六
年十二月廿一日御書院番組頭○
享保二年九月十四日死年四十二葬同
寺中に葬

（宝永二年十一月廿六日小普請入）

享保二年十一月六日家督弐百石○
同月十五日初見○延享元年四月十日
死年七十同寺于葬

矩武　八郎大夫　初文吉

実松平主書勝吉次男
養子○延享元年十一月朔家督小普
請○同年九月十八日初見○延享二
年十二月廿二日御納戸番○同年
五月九日西丸御書院番○延享四
年十二月四日進物番○宝暦十
二年十二月十一日進物番西丸○明
和元年八月九日死年二十来同寺
ニ葬

正記　帯刀　初八郎　八郎大夫

実父永添文郎勝陸二男

家治公○明和元年十二月九日家
督小普請○同年十二月廿一日初見
○同二年十二月廿一日御書院番○安
永元年十二月廿八日病免○同二年
十月廿一日御書院番○天明二年五
月廿八日死年三十二某同寺に葬

正融

八郎 左京 初 辰命

實松平内記親章次男
安永九年十二月廿八日家治公○
天明二年八月七日家督小普請○
同年九月十九日初見○同七年九月
七日御書院番○寛政七年十二月廿四日
小普請病辭許る

東照宮御代

松平 源姓 然見 三万弐百石

家紋 丸ノ内ニ葵 慶長三月 飯笹 五七桐 丸ノ内ニ葵 丸ニ醍醐 丸ニ桐

松平広大馬昌利二男

傳六郎

重昌

東照宮ニ自御取立ニ被召出 被仰付大御番之

附テ遠遊之後被遣之札

大猷院殿ニ奉仕大御番○寛文六年
五月十四日御裏門切手番ト成○同年
十二月十二日加秩弐百俵○同八年十
月十四日死四谷西念寺ニ葬

○

昌定　彦九郎　九郎三郎

寛文七年十二月廿一日初見（二男ナル）○同年十一
月廿一日新ニ弐百俵下サル大御番○

天和二年八月廿八日病免○元禄十
二年十二月八日復仕○宝永二年
十月七日死七拾歳同寺ニ葬

光昌　市左郎

元禄十二年十二月八日家督小普
請○同十四年十月十八日桐之間番
○宝永六年十二月廿一日大御番○元文

同年六月四日大番組頭〇〔差扣〕願
寛保元年七月廿五日御役免差扣
〇宝暦六年十月十二日死七拾又
来同年小普請

昌剛

彦蔵

享保二年十二月廿六日初見〇同十六
年十一月廿八日大番〇寛保二年
九月八日御勤〇…〇同三年十二月

十四日出火之節於御城出精ニ付御番〇寛延二
年十二月廿八日大番組頭〇宝暦六年
十月十二日父死同十四日ニ而家督相続
〇同八年十一月廿一日病免〇安永六年
正月廿一日死七拾…同年小普請

昌勝

長之助

宝暦二年十二月廿六日初見〇安永

同年十一月十四日死 六拾四歳 同寺

小姓

昌廣 萬太郎

實昌勝惣領

安永六年十二月廿六日嫡孫承祖○

同八年四月六日初而御目見 小普請

嚴有院殿御代

松平 紋見

源姓

三百石

家紋 花菱 丸ノ内蝶 飯笹 五七桐 五三桐

松平勝左衛門昌吉之曾

市左衛門 初 権之助

昌忠

万治二年七月十二日新知三百石

○寛文年月日小姓組○寛文年月日病死○

元禄九年八月廿日死 四谷法蔵寺

小ニ葬

昌太

十太夫 初 平三郎

主膳

初昌清

延宝六年五月廿九日御書院番

○元禄九年十二月八日家督○享

保二年十月十九日致仕 同六年

十月廿九日死 六十六 [illegible]

華蔵寺小ニ葬

昌成

庄左衛門 初 主水

實楠喜之丞二男 [illegible]家人

享保二年十月十九日家督 小普

請○同年十一月 初御目見○同四

年十月十八日御書院番○同八

年十月八日死 [illegible] 四谷法蔵 同寺ニ葬

葬

次郎左衛門　初　織部

昌信

享保八年十二月廿六日家督小普請○同九年十二月九日初見○元文三年十二月廿六日西丸御書院番○寛保三年十二月十六日病免○寛延元年十月九日西丸御書院番○

昌豊

織部　初　主膳

實大岡平八郎貞通四男

宝暦四年十二月廿七日病免○同十二年閏四月十二日西丸御書院番○明和三年十二月廿七日病免○同八年閏七月廿日致仕○同八年八月六日死去十文来同年十月小葬

明和二年八月廿二日継家督○
同六年四月八日家継小普請清○同
年十月廿二日西丸書院番○同八年
二月廿二日吹上ニテ講武ノ節
時服弐ッ拝領○同九年四月關
嘗康上ノ御紀様御傅付○安永
年四月關明ノ御紀様御傅付被仰
同六年八月廿九日死ス年五十九法名
本了小夢者

昌職（トモ）

十左衛門　初鉄之助

初昌福

實大岳修理亮易直二男

安永六年十二月八日家継小普請清
○同年十二月廿一日初テ御目見○天明元年
八月七日西丸御小性組○同六年
同十月廿日西丸御納戸○寛政二年
九月四日西丸ニテ傳御小性ニ成

宝永元○同七年十二月廿六日小人今宗将
御行勤子○同八年十二月十日免
附

大猷院殿御代

松平　能見　高二千石

源姓　家紋　雪笹 七曜

松平丹後守重直曾

圖書　修理

重長

寛永十年新知分知二千石○
慶安二年九月二日長崎ニ在御書
院番○万治二年八月廿一日御書院

寄組ニ入○寛文四年四月四日病免
小普請○元禄二年十月廿四日死
六拾二歳浅草海禅寺ニ葬

重花　主税　初　八之助

寛文十二年五月廿六日御書院番
○元禄二年九月九日死四拾五歳

同寺ニ葬

圖書　初　平八郎　八之助

勝芳

實重花惣領　嫡孫承祖

元禄二年閏正月初見○同年十二月
十二日家督小普請○同十四年九
月十二日御小性並○同十六年十二月
廿一日御小性○同十六年四月七日
御免小普請○享保四年十六月廿

六日寄合○同九年十月九日書院番○同十四年七月廿七日小性組番○享保十六年五月四日病免○寛延四年五月廿日死七拾歳同寺に葬

勝房

圖書　初　平八

寛保元年八月十一日初見○寛延四年八月四日家督寄合○安永七年五月十四日死七十五東同寺に葬

親章

圖記　初　安太郎

實松平東市正親紀二男

寶暦二年八月廿四日養子○同九年十月廿一日初見○安永元

年十月十二日死ニ付継目来同年
ニ葬

勝政　　圖書　初　八之助
寛　親章　次男
安永元年十二月十二日嫡孫承祖
○同年十二月十八日初見○同
七年四七月十七日家督相続之合○
寛政二年十二月十八日御番入免

○同八年九月廿日御番入之免○同
十年十二月廿一日[illegible]書之段

大猷院殿御代　御書物方出ル

松平 経見 高武子孫

源姓 家紋 竜笹 七曜

松平丹後守重直之嫡

母庫氏 初 御紋 宮周

直政

正保二年朔日見松平市正以英親

くるま紀二千石〇奉安同年朔日

厳有院殿御小姓〇同年八月十六日

叙爵○明暦二年（初而）小性中奥
寄合○（元禄五年七月十八日）御使番被任○元禄十一年十二
月八日死六十八葬浅草新堀海
禅寺ニ葬

直賢

主庫　初　権助　傳門

（元禄十二年七月八日）（初而御目見）被任一言
家督寄合○享保七年
七月十一日被任○同十八年六月十一日

死六十九歳下谷○山門院ニ葬

武卿

織部　民部

享保七年七月十一日家督寄合
○同十一年（初而）御使番○同十九年
（初而）御徒頭○元文二年九
月十二日林田信濃守へ小普請組家

断絶

武清　幸十郎

父改易の時加家法道に改浪去（同く改易）（元年十月）
宗卜去英信寺に葬の同年十一
月廿二日　将軍　宣下の恩依
改易せ見

有徳院殿御代

松平　能見　高昌信
源姓　家紋　丸ノ内九曜枝　又葉三葉葵　分銅
松平左馬昌利二男

昌舎
長左馬

有徳院殿新規召出され昌信口
駿河国清水にて家の後ヲ遣され
大永年中口明暦元年十一月八日死

六拾俵二人扶持ニ而召出候年不詳

舎治

安左衛門　初　広九郎

大猷院殿御代大御番ニ寛文二年

六月八日死ス跡拾人扶持相続年月不詳

舎信

源左衛門

寛文二年十二月十日大御番ニ宝永

七年八月十八日大御番組頭ニ正徳二

年二月七日死ス六拾俵相続年不詳

義陰

広九郎

宝永六年四月六日大御番ニ正徳

二年二月廿四日家督同四年

二月十一日新番ニ享保十八年十二月

十九日死ス後依家門寺ニ葬

昌相　広右　後住正休

享保十九年十二月二日家督出書清
○寛延元年四月二日請住○西水
六年八月四日死ス後依九案門寺
ニ葬

1

義同　岩之助

實義陰ノ舎男

延享二年十二月四日生誕○
寛延元年四月二日家督出書清
○同二年九月十六日西丸ニ納戸○
宝暦九年十二月十六日清勅の賞
今之役○同十一年八月二日又方

同綱吉○同十二年十二月廿二日免
同綱吉○天和二年十二月廿二日死
相又兵衛同年ヨリ養子

義貞

源左馬　初源太郎　吉房
実神谷与一郎久武二男
明和二年八月六日（年廿五才）家督小普請　清

○同六年四月十四日大番○天明
六年十二月廿四日新番

大猷院殿御代

松平 鐘覚

源姓

高三百俵

家紋 丸内三葉葵 又紋葵
丸内破唐花重ね桐
五七桐

松平勝左衛門昌吉之四男

勝左衛門 初 上之助 次郎兵衛

照昌

次郎左衛門 宗左衛門 五左衛門

庄之助

寛永十八年七月廿日初而奉拝妾

二年十二月廿六日為若君御小性組
○同三年九月為丸御小性組○[illegible]
元文年十二月十八日廩米二百俵○同
二年九月十八日為御小性組○元禄ゞ
三月御現小病免○同十六年六月廿七日
死七十葬麻布大泉寺ゞ葬

光森

次郎左衛門 初 権左衛門

又左衛門

寛文十一年九月廿八日初見○延宝
六年十二月廿九日為書院番○同八年
二月廿九日三百俵○元禄二年閏正
月廿一日桐之間番又左衛門後改○同七
年七月十二日病免○同十年十二月
十九日為書院番○同十六年六月廿
七日父死同年家督○
享保十一年十二月廿六日老免○同十
二年六月廿六日死七十二葬同

寺ニ葬

二男某腹
光恵　又次郎

元禄十四年九月廿日初見○宝永六年閏月六日中小性組○享保十年十月十一日死同寺ニ葬

四男某腹
光隣　大五郎　初ハ左五郎　三之丞

右門　後住　松嶺

光明　又三郎　後住　清水

享保十一年十二月廿二日惣領○同十二年八月二日家督小普請○同二十年七月十二日中奥番○明和二年十二月廿七日病免○同六年閏八月致仕○天明七年十一月廿七日死八拾七歳同寺ニ葬

御當地ニ而○宝暦八年八月二日初而御目見

○明和元年四月八日家督○安永二年

年七月廿日悪口書差出候ニ付閉門差

九月晦日病死○寛政元年四月廿

二日跡役仕○

光信

千次郎

寛政二年（元年四月廿二日家督中小性組）九月廿八日初而御目見○

東照宮御代

松平 能見 高五百石

源姓 家紋 丸内ニ笹 五ツ桐

松平大隅守重勝二男

淡路守 初 傳太郎

重長

東照宮[illegible]

慶長十七年[illegible]

[illegible]

故ニ本多伊勢守へ御預ケ元和二年ハ越後
少将忠輝改易ニ付テハ御咎
父子同越後ニ赴ク同年九月大坂
御陣の時信秀被召江戸御目見以来江
戸へ参り大坂へ御使いたし候處登
城御咄ありて病ニ而相果候
さ御咄有之寛永二年十二月晦日
死去年十二歳糀町心法寺ニ葬

重則
大膳亮　初半左衛門　内蔵助
重則孫松平伊賀守忠利方ニ奉公
仕ニて死後断絶

重信
源吾
忠勝書院番ニ而信州海野道の時殿中
ニて牧野伝太夫重永ニ切殺負傷
寺社ニて切腹二十歳

勝隆

出雲守　初忠篤　市正

従任　覚雲

慶長十五年初而御目見○同十八年

初而台徳院殿に仕○同年十一月廿日

駿府において謁見す時大番役を

命ぜらる○同十九年冬大坂陣

東照宮及御旗本に従ふ十二月二条

の城において従ふ○同二十年五月六日

東照宮二条より駿府に還御の時

台徳院殿は未摂州勝山に在陣

于時松平石見守康安永井信濃守

命を奉じ勝隆二人大和国郡山

城に遣はさる○同年

台徳院殿伏見より還御の時彼地より

迄大和の御郡山の留番を務め

所領の儀に付て二人に金銀若干枚つゝ

しかる処より駿府へ仕寄ありしに向
同年某陣して私事の色動も又
月七日落城のこと
東照宮御旗本と案内山へ寄らるゝ時
御さきへ鉄炮の者十人諸軍備へ給
動きを騎隊御絵に撰抜きを
町中出んとしける時味方扣る所の
鉄炮者隊働動時ますの植田某
平松共派と云人抜群の名誉也

更に何とくしく引退ける、ところ
小笠原御帰陣の後
東照宮御旗本大番組敗軍の吟味
騎隊一人に付らる、同年元和元年九月
其頃駿府城門の番の御指図へ
命され大番の敗へ須賀の事と合
せらし御目見之越後守にて同
よ勤させ遣し帰府の事は
東照宮御側にて御寝所へ入る

如此れ御請候迄○同二年四月
薨御ニ付江戸ゟ参候迄
久世大和守殿より仕大番頭○同二年
朝〻初二千石加増○同年十二月叙爵
市正ニ被仰付○同十六年閏月初
大坂御城番○同年十二月頭二千石
加増○同九年六月
大猷院殿より御仕御上洛供奉之節
御道筋のかため大番頭ニ而承之

二歳大坂城番命せられしは〻〻二歳
但馬の大猷様思召之〻〻〻〻
と被命勝之御○同年十二月植村
出羽守家政大番頭被仰付〻〻付
家政の年許ハ家政ヘ被下○寛永元
年七月大坂御城番与力十騎被付
〻付ける○同二年十月帰府○同三年
七月
大猷院殿御上洛供奉○同八年七月

大坂城代被仰付七年八月帰府○同九
年十二月廿日松平越後守光長妹
大猷院殿御意女子ニ被成之九条
大納言兼晴へ御入輿の時使者○同
十年十二月九日四品参議兼大番頭
○同年十二月（初ハ）加賀守後石見守○同十
年六月
大猷院殿三回忌法事住持○同年九月
松平中務大輔忠知卒去ニ付後遺領

松山を請取れ在城の事を相拝之
同年十月（初ハ）帰府○同十二年
四月（初ハ）讃岐松山城を松平隠岐守ニ
引渡○同年十一月九日寺社奉行
兼帯して大番頭を兼る事もと
ゆるさる○同十三年四月四日卒
依之○同年七月七日亀之助伊賀守
忠恒死後松平大和守と縁家によ
勝澄明石城移之ニ申されし

走廻の事ハ之を知し○同十四年　朔日之御祀
別洛京ニ而二條郭より同十九年正月二日
松平伊豆守信綱戸田左門氏鐵ニ外
被地参向の後将軍御和の使役と勤を
らる之即日参向之例古田より以来落藏
の位を有之れ東京安済一郎門屋
又日本住宅より御帰府○同十六年
正月廿八日江戸より召合の為参着令一万
五千石ニ上総國佐貫城主に仰付らる

○同十七年四月日光山御社参の時
供奉を勤む○同廿一年四月日光
山御参詣勤む○正保二年四月同
○同三年
東照宮の廟所之列額田郡御供持よ
御造営九月十七日　御遷宮正遷宮四月
同年十二月九条道房公夢見御まつき
え京○同年四月日光山御参詣あり
○慶安元年四月

東照宮ニ而も日光山ニおゐて法華八
講執行の例有之候處寛永中依
因有志慶長忠年より元和二ニ俗体ニ而そ
御勝ニ相成候　○同二年
厳有院殿御代日光山ニおゐて被附秋元
越中守当職ニ而右山ニ而○同年九月
細明ニ紀州高野山の学侶行人方争論
ニつき久世大和守広之并松平信吉
正直弱井右京亮直并小勝隆

大猷院殿御前ニおゐて者凡御仕置無御座候
一山の僧侶へ備達同年十月御府
○同二年四月日光山ニ於而仏事執行
○同四年七月御祭事
厳有院殿御代とも／＼
大猷院殿霊廟ニ焼香○御本廟ニ而二季
同月日光山ニおゐて
大猷院殿御同所ニ而御万部ニ執行被仰付法
会執行○同二年九月廿日

後光明帝崩御ニ付御葬送御法会
掛リ上京○明暦元年九月朝鮮人
日光山参詣之節ニ付掛并ニ御用ニ
而被遣候○同二年十二月叙
織部正被仰付○万治二年二月廿一日
御養君甲府宰相様御家老雁之間詰
○同三年九月就封十月甲府ニ付
年十二月下之鷹部（の鴨）被仰付○寛文二年
九月御目見被仕○同八年十月廿日剃
髪覚雲ト改同八月八日被仕御附
用人二江次直之條添勤之申候
家老之勤方ニ付今之ニモ夫体
甚之ノ御上意ニ寛文九年
閏月御勘閉（古作差行候 家督二男右ニ家）勤之○同
六年二月廿日死七十七歳
國依貞花葬駒込谷勝隆寺ニ葬

重隆 三四郎

寛永九年七月継父初見ス同月廿八日家

綱卿ニ附属シテ命ヲ蒙ル

同年七月十日死

勝廣 初傳太郎

早世

重治 修理亮 初宮内 傳三郎

宮内少輔 母ハ某氏

実ハ同氏織部正某女子

慶安元年六月廿八日遺跡

同二年六月十二日初見

二年十二月廿七日叙爵シテ宮内少輔

ト改ム寛文二年九月晦日死

替○同年十月八日附忍
八月朔日ニ而之を役○同十二年
正月九日屋敷ニ而寄○同四年
四月九日日光ニ而御参詣○
同年十二月ニ而紀伊ニ而御番
頂戴ニ而佐賀城ニ而方
天和二年○同五年十二月
十二日ニ而役ニ而○同七

年初大坂加番七月朔日御暇同
八年八月十六日帰国○同十年
四月十二日奏者番○同十一年十一月
廿二日紀州ニ而使○同月廿八日御暇同年
二月廿九日帰国○同十二年閏二月
廿八日佐賀城○将軍二重櫓ニ而御建○
延宝元年十二月廿七日厩中ニ而
ニ而文武忠孝○同二年十二
月十九日同上○同三年十二月廿二日

与位来り免役○同七年十月廿
六日宗儀奉行同八年十二月
巖有院殿御葬送御用掛り同年十
二月廿二日越後中将光長家臣出入
大老并田之馬山東ゟ尾張守論吟
味掛り同九年六月廿一日大老間ゟ〱
常憲院殿御臣の御吟味の時出座○
天和元年十一月廿一日修理亮之改
○同月廿八日病死○同二年十二月病

の間詰四番の所添跡役○貞享元年十一
四番の所丈務
月七日評定所ゟ〱御吟味中保科
肥後守ニ仕置ニ事ゟ同月十日御用
ゟ之あとニ出座ニ承ニ御役杖御朱
之首信を御○同二年十二月二日出席
御納戸番頭合津ニ赴く○同年八月
二日御役ゟ〱免○同果十月構
平右衛門重○拾俵ゟ〱合津ゟ

若松町融通寺にて火葬同所
南青木村大窪山に葬

重宗

但馬守　初 傳之丞

寛文十二年十二月八日初見○延宝七年十二月廿八日叙爵○天和元年十二月九日死十八歳徳園

天羽郡佐貫花香谷勝隆寺に葬

曾
勝秀

圓之助

貞享元年十一月十日父重宗保科肥後守正容に預らる父の科によりて同日弟小三郎とおなしく松平日向守信之に預らる○同年十二月七日信之所領大和郡山にして卒○同

年頭山より下総国古河の一城封よ
つき相続しく古河ニ相移○同年
六月廿八日寺小三郎同仮山城光○
元禄六年八月十二日石高さ仏名信
同年十八日卒○同七年十二月二日初
見○同十一年十二月二日従五位下信濃守
叙○享保十二年八月廿四日死
年廿一葬浅草龍宝寺小名寺

信方
小三郎
初 重安
貞享元年十一月十日大番組ノ科
小より兄之丸小松平日向守信之へ
山城○同七年六月廿八日山城光
○元禄十二年十二月六日松平忠兄
思ノ勝割当ときう同十四年
而親ゆく実家へ病ニて○二十五歳
隠居ニ家督川小五郎早世

其子嗣子なきに依て正徳二年七月
九日小太郎名跡として旧領のうち
三百石下されて寄合に加へらる

勝文　次郎助

實今川民部範主嫡男
享保十年十月二日書院番○同十
二年十月四日家督を継ぐ○元文
四年二月二日初見○延享二年
九月十二日西丸小性組○寛延二年
三月十九日死す年二十八葬同寺に葬

勝興　傳三郎

寛延二年四月二日家督小普請
清○明和四年八月十日西丸御書
院番○同四年十月十八日辞職

村上隠居地ニ被成候〇同六年二月廿
一日小弓場ニ而射候ニ付金二百
今度被成候〇同七年二月十四日磨之
御書付〇寛政二年正月廿二日尭
世話被成〇同年十月廿一日大納言様
時服二被成候

大猷院殿御代

松平 鎧覧

源姓 二万五百石

家紋 丸ノ内三笹

紋 桐

松平出雲守勝隆二男

母 清和守 初 伊三郎

勝広

実松平淡路守長熙候

寛永九年閏二月初生る○同年
七月十一日初見○同年十二月
廿日叙爵号出羽守○同十二年
六月廿日上洛供奉○同十一年
六月ニ而そて追加○寛文十二年
十一月廿二日死去年五十九法名□常
正信寺ニ葬

勝割

忠春　初市之丞

女　某仲　某恒　某妻　後住雲山

寛文六年十二月十九日家督
之九持田知行五百石分合○
同年十二月廿六日初見○

同七年十一月廿六日御書院番
○同十一年六月廿八日御納戸頭
○貞享元年十一月七日御目見
松平修理亮家来の
者ニかゝり候科　貼紙ニ容
小出氏にてさしはなし候御割
元禄書院番頭兄売之ニ預同月廿日

御納戸頭ニ同年十二月廿四日寄合ニ成
御免○同日御目見寄合ニ成同月廿七日廣敷
番頭ニて五百俵加増同十年十二月廿三日
御目見寄合ニ成○元禄九年四月廿一日
御書院番頭ニ成○同十年十二月十八日
本役○同十一年七月二日五百俵加
本地ニ(擬)候○宝永二年五月十四日病
免○享保十二年十月九日致仕
○同十二年十二月二日剃髪号心

○元文二年八月四日死九十歳同
寺ニ葬ル

忠虎 初三之丞 大次郎

勝閑

初 三之丞

實ハ今井權左衛門貞房ニ男 松平日向守家臣

寶永二年四月廿七日御養子

○享保六年八月九日初御目見○同十二

年十月九日家督小普請○同二十

年十二月朔日西丸勤番○元文元年

八月廿八日病免○寛保元年十月

廿八日西丸小性組○延享二年五月

七日道奉行○同四年十一月六日

道奉行如元○同五年五月朔日寛

延小性組組頭○同年十二月廿一日布衣

○寶暦八年十月十八日病免寄合○

鉄炮頭○同十二年八月二日死七十九歳

○同十一年七月廿日
惇信院殿御廟番之御番入被仰付候
○同年十二月十五日西丸表御徒○明和八年
同月六日部屋住ニ而御番入被仰付候
○同年十二月十三日死七十七歳同寺
小葬

勝詮

二郎太夫　初　端太郎

寛延二年十二月廿八日初見○明和
八年八月九日死四十七歳同寺小
葬

勝武

大隅守　初　又太郎　忠兵衛

實勝詮男
明和八年九月九日嫡孫承祖○同
年十二月五日初見○同八年九月
四日家督小普請入○同年十二月廿

同日西丸御書院番○安永二年十
二月廿八日病免○天明元年閏
五月廿五日西丸小納戸○同年十二月十六日布
衣○同八年十二月一日西丸小納戸○
同六年寅年十月七日御本丸勤○寛政
二年十一月一日御小性○同四年
十二月十六日叙爵大隅守○同七年
六月八日出火之節精依有○同九年
閏七月廿一日御小性頭取

勝負

忠左衛門　始千太郎　又太郎

實大田播磨守二四房次男

天明四年十二月廿四日賀年始子○
同八年十二月廿一日初見○寛政十一年
又三月廿二日西丸小納戸○同年十二月廿
日布衣

右佐渡殿御代々　修理[illegible]

松平　称見

源姓　二拾七万九千石

家紋　丸ノ内十字　同

松平大隅守重勝ニ曾

大隅守　初半次郎

重則

内膳正

慶長十八年[illegible]

月ニ御暇〇元和七年十二月十日
大番頭〇寛永二年朔日大坂城
番〇同三年六月
天樹院殿御迎ニ播州姫路ニ赴く
〇同年九月
大御所ゟ京のうら江戸へ赴く
崇源院殿御遺例ニつき京都へ
急使〇同年十二月叙爵〇同
十年朔日御留守居奉行

〇同十八年十二月廿七日死ス年五十
歳〇法名[illegible]寺ニ葬

重正

主膳 初左京 八 [illegible]

寛永十九年六月御目見〇
正保二年六月朔日大坂加番〇慶
安元年十月同上〇万治二年
十二月廿八日叙爵〇寛文二年

九月二日死　四十歳　同寺ニ葬

重利　傳次郎　初忠兵衛

寛文二年十二月四日家督　同
月十一日謁見の日父之遺物献上　正
宗の御腰物を献ず　同八年十
月廿四日死　七十歳　家臣寺に葬

松平之御名入

松平　源氏　池田

家紋　揚羽蝶
三十六歳　祇園守

光政公同じく輝政公の家督時文六
十四歳年寄ノ御取次松平ノ称
号ヲ賜ヘリ

輝澄

後勘解由　石見守　松平　初称左近

慶長十四年寄取次初称六歳ノ時

一此古法花派之法義被仰付候ニ付
被仰付候比日奥不受不施派
願之通ニ而夫ゟ時ニ日暁派ニ而
有之 御赦免
再興之不受不施派日蓮宗悲田派日奥宗
相続候儀ニ付男女御宗旨御改ニ付
右之趣ニ相願候
被仰付候ニ付不受不施 右日奥十三ヶ寺
也日蓮宗の安穏ニ相成候年し

此録ニ載ル所ハ日蓮宗不受不施之
我送之候合 十三ヶ寺寛永
頃之宗旨 右ニ記ス○同六年
大坂表御奉行所ニ而御裁許○同年六
月ニ寛永御沙汰ニ付右之通ニ而
○元和二年御下知○同年
被仰付候ニ付文政御制法ニ而
御制度之義ニ付大坂表ニ而
日奥旨之義御制○寛永二年

年十九ニ而従四位侍従兼左衛門督
其子寛元嗣家督ヲ相続○同年
仍本府ニ葬ル [illegible]

嚴覧人

左近衛権少将
大蔵卿兼 [illegible] 土佐守
左近衛権中将源忠明 資 真 ○従四位
大蔵権大輔ニ而家督相続○同元年
十月廿日御卿ニ之九日主ニ従五位下 [illegible]

此年未ノ同八未年ヨリ備後国
備中国福山ニ二万石ヲ加ヘ六万石ヲ領ス
○同十七辰年七月為大坂御勤番
賜知行 至同国神辺ニ移居ス
万石ヲ加ヘ又ノ領国備後ノ内ニ
此領国ヲ以テ二万石合セテ十万石
廣ク之ヲ治ム三十四万石余之
寛文二寅年三月廿日病死 年七十 [illegible]

武蔵　当国(?)
松平伊豆守綱
之弟へ(?)

役出

徳之丞　采女

寛永十七庚辰年七月父ノ遺跡同
月日於(?)継(?)目(?)年頭(?)御(?)小(?)姓(?)
之(?)後(?)預(?)より御蔵(?)代年二月
隠居　○同年同(?)月病(?)死
将(?)軍(?)家(?)へ(?)内(?)証(?)石(?)下(?)○
寛文二年(?)　教(?)育(?)○寛文二卯年十
月十九日(?)順(?)(?)情(?)別(?)(?)

発(?)狂(?)之(?)日同国辰年同
勢(?)徒(?)(?)家(?)死(?)○同年十二
月(?)寛(?)病(?)死(?)

拝(?)借(?)
久馬助

役武

御番(?)往(?)内(?)
勢(?)徒(?)(?)○寛文五年(?)
(?)より(?)役出(?)(?)同(?)七(?)

某下文左衛門合寛将ニ百石ヲ与ヘ
ニ属ス元和中大坂陣ノ時軍功アリ
元和年中貞信ノ跡ヲ設楽貞次ノ
寺松平子孫設楽池田某ノ孫貞
院殿口貞享元卯年三月十二日病死
平塚門寺

設楽

初設安 設豊 設拾

久島助 初大手代

元禄七年 池田二之丞設栄 寿六十代

元禄十五年午六月
十五日池田 跡目
宝永四年二月十五日寿九十

貞享元卯年七月十二日跡目口元禄
西中各年六月十五日初目 貴人口享
保元亥年二月十七日病死六十八歳
門寺

貞元

初設守 設輝

伊勢守 初名

享保元亥年十二月十七日跡目口同年十二
主年付 初目 貴人口同年六

年四月十四日奉行所御役○三十五年丙戌
年御部屋入本郷之家被為別御座
御勝手方御用○宝暦七丑年六月廿三
右御番頭同年七月朔日御役○同
十二年十一月二日病死○同十二未年
六月十七日

宗長院殿回院常会御部屋女○ 明和九年四月十日職任 天明六年十月
春陽院ト病死七十五歳池上本門寺
葬る

政
政部

奥右筆御手 永助 初穂御番 久助
宝暦四戌年十二月九日初
死元年正月十九日○同八年十月十七日病
寛政九巳年正月二日病死

先祖年代御留書
高巡
宝暦十二年 八月廿四日御番頭
同十三申年十二月十九日 病死二十二歳
同寺

実奥平大膳大夫昌敦弟
奥平主馬　初源五郎　観次

実名　昌睦

明和二酉年十一月十五日　初而御目見
同九辰年　同月十日　家督　安永二巳年
同年　月　初而御目見　同　年　月
中将但馬守殿　生　嫡子　同年
九月廿九日　奏者番　寛政三年七月朔日
大坂加番　同年十二月十六日　御奏者番　同七年十二月
十五日　御役御免

諱名

中務　観貞
実松平伊賀守忠順二男

寛政五年七月十五日　奏者番　同八年十二月十五日
御役御免

一　家督相続之節　献上物　御太刀目録　馬代金
一　御太刀　一腰
一　巻物　三
一　馬代　一疋
一　御礼　一桶
一　御留守居　一人
一　銀子　一枚
一　家督相続之御礼　献上物相済候
一　家督被仰出候節　老中へ使者を以御礼申上候

一 御霊屋内ニ有之候掛橋

一 御堂之儀者前々ゟ修復ニ而寺無之

一 境内竹木今後伐採等ハ不及

一 居屋敷門ハ破損附其外修復之儀
　或ハ等閑ニ致シ候ハヽ

　中絶及ニ候

一 先住居置候輝院文播磨宗相
　輝及附

由緒之事

蓮乗院殿日詳聖人為 御菩提播
州姫路日蓮宗静照山
寺ニ而 建立住僧(ハ)
日蓮宗本山之儀ハ有之輝
候願ニ付山寺ニ付妙寺
見込輝修并開住職寛永
十七年七月願地ニ 石高
寺願 之候ニ付

一 日蓮真筆曼陀羅　一幅

一 法華経　但擬物　二部

右者拝見不被仰付候

一 右見分之儀相済候ニ付先月
日御附西之人々へ相渡返
其御月番布施ニ而差返
候処相達候

思召候　御家老ヘ申達候

御前ニ而拝見仕候

一 右同断之所ニ御拝見之由御尋也
御尋之段

御老中様御附衆 御尋ニ 承知 御懸旨

拝見候　　御座候

将軍様之所ニ御座候処申含候

御渡被成候　思召候通之候

御名代　十三日七後御暇

御目付　去年十一月迄御帯之御奉公

忠勤之仕合有早速上京仕候
仕候処御奉行所より病気ニ付
御前相勤も不仕候ニ付
上候処度々病気ニ付御暇申

一 寛永九申年
台徳院様薨御為御名代相勤
拝殿ニ而相勤仕候

一 増上寺
台徳院様 御霊屋 御門前 相勤候

地鎮二拝殿ニ御用候處被仰付
候由

一 寛永十七年七月廿日相勤
拝殿修覆相勤 東照宮
しつ三百石御加増 拝殿文字
同断 奉行 拝殿
国別 御用之仕合
小 候
候

一寛文二年正月輝院死去有之
相模守与被仰付
一能登守殿出願候ニ付御霊屋之儀
同寺院霊寺壹ヶ寺台勅願所
少常之儀輝寺建立被成置黒印
上頂戴之寺建立之一同山嶽寺
之中候
一舊跡後證ニ付御本坊勅願寺等
出來候

蓮光院　此寺ハ天正年中右禅寛文元
年中焼失之後院焼失有再建之
候而寺院等を被仰付有志之者
寄附ニ而及候　右寺ハ右禅師
建立候
一寛文十年能登守殿出死去有
同十年没後霊屋御為御祈禱料
被下候
右寺中御修復之儀此院龍宝院

以承知

国立公文書館
National Archives of Japan